

# 本州アイヌと津軽エゾ

## ―九戸城の戦いの「夷人」から遡って―

新井隆一

はじめに

十四世紀前半、出羽のエゾ蜂起をきっかけに安藤氏内部の「蝦夷沙汰代官」の地位をめぐる争いと結びついた津軽大乱（安藤氏の乱）は、鎌倉幕府を大いに揺るがす。私は、前稿で、能代市洲崎遺跡で出土した底部に「×」「米」などと刻印の刻まれた漆器に注目して、出羽のエゾの背後に、北日本海を南北に動く中世アイヌが存在したこと、洲崎まで南下したアイヌは、当該期の北海道の様子について述べた『諏訪大明神絵詞』（以下『絵詞』）に出てくる「日ノ本・唐子・渡党」のうち渡党にあたることを指摘した。<sup>①</sup>このうち鎌倉幕府は、隆盛する北日本海交通を抑えきれず衰退の一途を歩む。それに対して、安藤氏は、内紛を乗り切り室町幕府の庇護のもと復権する。それとともに、洲崎遺跡の漆器は、いまだベールに包まれた本州アイヌの歴史の実態を照射することにつながることを示唆する。

ここで留意したいのは、本州アイヌに関連する文献・考古の史資料群が、北奥の日本海側よりもむしろ太平洋側に多いことである。<sup>②</sup>この地は、安藤氏と並ぶ中世北奥の二大勢力・南部氏の根拠地である。果たして、

南部氏は、安藤氏と同じように、北方交易の担い手として躍動したのだろうか。本稿は、まず、北奥の戦国時代の最終章となる九戸城の戦いにアイヌが活躍することを皮切りに、南部氏と本州アイヌとの関係や南部氏のネットワークが北海道の中世アイヌ社会にも深く食い込んでいたことを指摘したい。つぎに、鎌倉時代の津軽エゾの蜂起に着目して、本州アイヌの南部氏領内への移住の時期を特定する。そして、古代末期（十世紀から十一世紀）の津軽地方の発掘成果からアイヌの祭具の一つであるイナウの源流に迫ることを通して、本州アイヌと渡党の淵源を明らかにする。さらに古代まで遡ると、『日本書紀』以下の『六国史』には、津軽蝦夷えみしの活動が見られる。蝦夷からエゾへの転換点とその指標を紐解くことで、津軽エゾの実体について理解したい。そのうえで、近年、大規模な発掘が行われ、多種多様な遺物・遺構が発見され、津軽の一大拠点と把握される青森市石江遺跡群の新田（1）遺跡を再評価し、古代末期から中世の北奥の歴史的特質を導きたい。

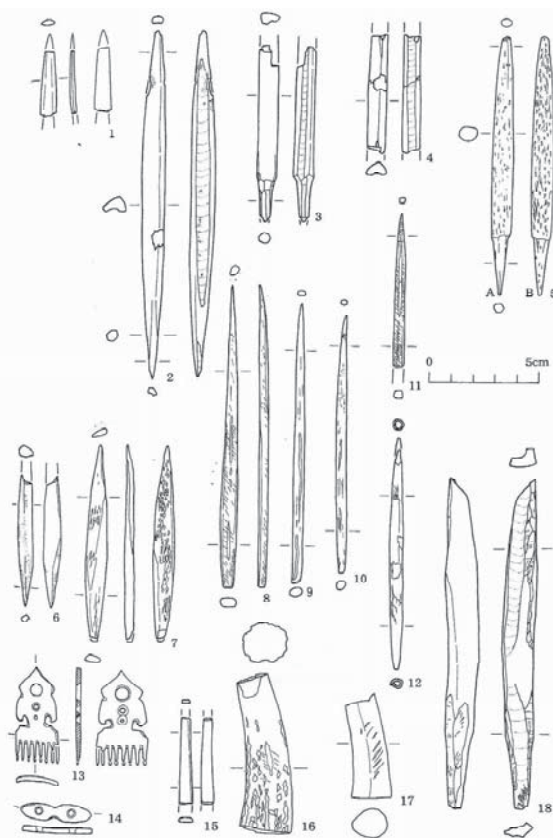
### 一、南部氏と本州アイヌ

(一) 北奥・本州アイヌの痕跡

天正十九年(一五九一)天下統一を目前にした豊臣秀吉は、蒲生氏郷を総大将として、奥州仕置を敢行、クライマックスに北奥まで進軍する。これに対し、南部一族の有力者・九戸政実が、南部氏の当主・信直と豊臣政権に叛旗を翻し、九戸城に籠城した。九戸城の戦いの様子を描いた『氏郷記』には、「毒矢ヲ射サセントテ夷人ヲ少々召連」とあり、戦いの最中、蒲生氏郷は「夷人」を戦闘要員として招集している。この「夷人」は、毒矢を用いることからアイヌと考えられる。この史料によって、アイヌが九戸城の戦いに参加したこと、南部氏がアイヌと何らかの関係をもっていたことがわかる。<sup>③</sup> また、『氏郷記』には、「此城ニ夷人二人籠城イタシ候」ともあるので、籠城する九戸勢のなかにも、「夷人」がいたことが知られる。さらに、「酒ヲ給リケレハ盃ノ上ニ箸ヲ一前ノセテ酒ヲ受其箸ヲ持テ立色々ノ舞ヲマヒ箸ニテ鬚ヲカキ上テソ呑ケル」とあり、二人は、九戸城開城のおり、氏郷の前に召し連れられたとき、箸を使って酒を受け、様々な儀礼を行っている。この箸は棒酒箸、イクパスイにあたるものである。おそらく、当時の南部本宗家の本拠・三戸城や政実の居城・九戸城の周辺に、アイヌが居住し、いざ戦闘のときは召集に応じるなど、主従関係を結んでいたことが推定される。敵対する信直・政実双方ともに、アイヌに対する幅広い人脈をもち、重要な戦力として抱えていたのである。

ところで、南部氏は甲斐源氏の支流で、初代光行は奥州合戦のときに頼朝に従い下向した。そのときに糠部の地を賜ったこと、これが南部氏のルーツである。糠部の地頭には、鎌倉幕府執権・北条氏が任命され、

南部氏はその下で活動していた。糠部は、鎌倉幕府滅亡後、鎮守府將軍足利尊氏の管轄となり、建武新政権下において糠部郡が置かれた。そのときに飛躍したのが南部師行で、南部氏の糠部地方における覇権の基礎を築いていく。<sup>④</sup> 十四世紀後半から十六世紀前半にかけて、南部本宗家は、本拠として、奥大道から別れて糠部方面への入口にあたる今の青森県南部町に聖寿寺館を構築した。聖寿寺館では、青磁・白磁などの中国産陶磁器や瀬戸・美濃産の灰釉陶器、小札・鉄鏃などの武器・武具類とともに、骨鏃・中柄・刺突具・骨針などの骨角器が出土している(図1)。<sup>⑤</sup> 中柄は矢じりと矢柄をつなぐ道具である。これらの骨角器は、アイヌが狩猟のときに用いるものと同じである。こうした遺物は、北海道からアイヌが一時的に北奥まで南下したというよりも、聖寿寺館の付近にアイ



〈図1〉 聖寿寺館遺跡出土骨角器

又が居住していたことを表している。南部氏が勢力を伸張させた十四世紀以降、九戸城の戦いに至るまで、配下にアイヌを率いていたことは疑いない。

さらに、目を北奥の太平洋側に移すと、ここにもアイヌの痕跡が認められる。南部氏の支族八戸氏の本拠・八戸市根城からはアイヌが用いるガラス玉が発見された<sup>6)</sup>。下北半島東通村の浜尻屋貝塚でも、十四世紀から十五世紀のものとされる骨角器や海獣猟・アワビ漁に用いる道具が出土している<sup>7)</sup>。中世国家は、出羽・陸奥両国の外にあつて、蝦夷島を望む境界として、「津軽・外浜・宇曾利」を位置づけた<sup>8)</sup>。『絵詞』の渡党の根拠地の一つにも、「宇曾利鶴子別」がある。これを函館周辺にあてる見解もあるが、宇曾利はすでに十一世紀中葉の前九年合戦を描いた『陸奥話記』にみえる地名で、下北半島にあてるのが妥当であろう。とすれば、下北半島の浜尻屋貝塚に足跡を残したアイヌたちは、渡党の一派であつたと解釈できる。宇曾利はもともと安藤氏の「蝦夷沙汰代官」職に伴つた所領であつたが、十五世紀前後、南部氏と安藤氏は激しく抗争を繰り広げた末、八戸南部氏が下北半島への進出を果たす<sup>9)</sup>。このとき八戸南部氏は、安藤氏の傍系・師季（政季）を下北半島の田名部に擁立し、「下北半島―道南」ラインを抑えようとする<sup>10)</sup>。しかしながら、「安藤太」と号した師季は、享徳三年（一四五四）「狄の島」（北海道）へ逃亡、武田信広などともに南部氏に叛旗を翻し、「下之国・上之国・松前」の三守護を置く。ただし、師季は、「狄の島」に長居せず、康正二年（一四五六）「出羽湯河湊」（男鹿半島）の領主・安藤堯季を頼り、檜山（能代周辺）を奪い、新たな本拠とする。これ以降、師季は、姓を安藤から安東

へ改める。さらに、翌年、田名部の領主・蠣崎蔵人は、師季と通じ、八戸南部氏に反抗するが失敗、松前へ逃亡する。蔵人は、「上之国守護」の蠣崎季繁と同族であつたとも推測される。ともあれ、こうした変遷は、南部氏に敗れた安藤氏の勢力が、道南を拠点にしようとしたことを意味している。そして、この時期の道南には、志濃里・箱館・中野・脇本・穂内・覃部・松前・禰保田・原口・比石・茂別・花沢の各館が築かれた。道南に逃れた安藤氏の勢力は、これら道南十二館を抑えようとしたに相違ない<sup>11)</sup>。ところが、長禄元年（一四五七）アイヌの西長・コシヤマインが志濃里（函館）の鍛冶屋村で和人の鍛冶とアイヌの若者とのトラブルをきっかけに蜂起し、道南十二館を襲撃するという事件が起こる。道南のアイヌはこの蜂起に賛同、茂別と花沢以外の館を陥落させる。乱は、蠣崎季繁の婿となり、蠣崎氏の家督を継いだ武田信広によって鎮圧されるが、安藤（東）氏に連なる勢力とアイヌとの関係におおきな禍根を残した。要するに、コシヤマインの蜂起は、安藤氏の道南進出が引き金となった可能性が高い<sup>12)</sup>。とすると、安藤氏と敵対する南部氏は、コシヤマインの側と近かつたとは考えられないか。従来、南部氏とも密接なパイプをもっていた道南のアイヌ社会に、安藤氏が介入を強めたために、軋轢が生じたのではないか。もちろん、コシヤマインにつながる道南のアイヌは、渡党の後裔であろう。『絵詞』には、渡党が「津軽外浜」に赴いて交易を行うとある。一般に「津軽外浜」は、奥大道の終着点の現在の青森市周辺を指しており、渡党を安藤氏に近い和人勢力とみる見解が根強い<sup>13)</sup>。しかし、最近、陸奥湾の東側最深部・下北半島の付け根にあたる野辺地付近を、東の外ヶ浜として、北奥の日本海側と太平洋側を結

ぶ交易拠点とする意見が出されている（葦島栄紀氏のご教示による）。これをふまえて渡覚が野辺地にまで出没していたとすると、彼・彼女らは、安藤氏から自立し、本州との多様なパイプをもっていたと理解できる。

## （二）南部氏と北方交易

そこで、南部氏を起点とする北奥の太平洋交通は、北海道へもつながることを想像したい。秀衡椀・浄法寺椀とされる南部産の漆椀が、平取町二風谷遺跡1号墓・木古内町札刈遺跡2号墓・千歳市末広遺跡IP14など、北海道の太平洋側で出土している<sup>(16)</sup>。これらの漆椀は、たなびく雲の形や中央に菱の形をもち、南部産の特徴を備えている。とくに、二風谷遺跡のものは、桃山時代の製作といわれ、九戸城の戦いと同じころに作られた。また、聖寿寺館では、天目台・櫛などの漆製品が見つかっている<sup>(17)</sup>。九戸城でも、漆工房とされる掘り込みの深い堅穴遺構や漆の付着した貝殻・漆塗りの鎧の札が出土している<sup>(18)</sup>。十四世紀中葉に書かれた往来物『庭訓往来』のなかに、「奥漆」とあり、南部氏の領域は漆の産地として著名であった。この地の漆は古代以来の特産物で、八〇九世紀には爾薩体の蝦夷が陸奥国府や都へ貢納し、官衙や寺院造営の際に用いられた<sup>(19)</sup>。時期は下って、江戸幕府の役人・村上島之丞の作といわれる『蝦夷島奇観』の古椀図も、南部産・浄法寺椀の特徴を捉えたものとされる<sup>(20)</sup>。この古椀図や末広遺跡の漆器は十八世紀前半のものである。こうして、南部氏は良質な漆の生産・流通に関与し、その視野のなかに本州のみではなく、北方世界をも収めていたのである。中世から近世にかけて、漆椀の生産を積極的に行い、北海道の太平洋側を中心としたアイヌ社会と

の交易を通して、自らの基盤を形成していったのではないか。なお、根城跡で、刀の鏝や刀装具などの鋳型が発見されていることから、アイヌとの交易用に鋳造されていたことが憶測される<sup>(21)</sup>。

では、南部氏は、漆椀などの交換に何を得たのだろうか。アイヌから南部氏にもたらされた交易品を探ってみよう。

まず、第一に鷹が思い浮かぶ。鷹は北日本の名産で、とくに蝦夷地は津軽・日向と並ぶ三大産地であった。すでに、平安時代から、ワシ・タカの羽は、権威の証として、都の貴族の渴望するものであった。十世紀以降、擦文文化が道北・道東方面に拡大していく理由も、ワシ・タカ類の捕獲・生産にかかわると説かれる<sup>(22)</sup>。ワシ・タカの羽の需要は、日本列島の中世において一層高まり、鷹は武威の象徴として、武士階級を中心とした権力者に好まれた。戦国時代を制し、武士政権のトップに立った秀吉は、北日本の鷹資源を独占し、都への輸送システムを権力体系に組み込んだとされ、そもそも奥州仕置の最大の目的は鷹資源の確保にあった<sup>(23)</sup>。奥州仕置にあたり、津軽の大浦為信などは、いち早く鷹の利権を差し出すことによって、恭順の意志を表明している<sup>(24)</sup>。反対に、九戸政実が仕置の最終ターゲットとなったのは、最後まで鷹に関する様々な生産・交易などの権益を手放さなかったからであろう。彼が、本州アイヌを通じて、北奥から北海道の太平洋側に独自のパイプをもっていたことは、九戸城のなかに「夷人」が籠城していたことからわかる。

つぎに、鹿も興味深い。南部産の漆椀の出土した二風谷遺跡のある胆振日高地方は、鹿の資源がとて豊富である。厚真町ニタップナイ遺跡では、エゾジカ送りの跡が見事に復元されている<sup>(25)</sup>。鹿皮は、北海道のア

イヌにとって貴重な交易品をもたらすものであった。その対岸にある日本列島の社会では、鹿皮は鼓・鞆・鞆・裘の原材料となるなど、用途の最も多い皮革類で、近世には、東南アジアから大量輸入されていた。<sup>(26)</sup> しかも、南部氏の支配地は、糠部の駿馬といわれる全国屈指の馬産地であった。<sup>(27)</sup> 鹿皮は馬具に多く利用されている。また、聖寿寺館では、矢筈の未成品とされる切断痕のある鹿角が出土している。浜尻屋貝塚の骨角器にも、鹿骨で作られたものがある。生態系の面からエゾジカとワシ・タカの産地は重なるという見方もある。<sup>(28)</sup> 北海道の太平洋側は、日本列島の中世社会の権力者の好む特産物のバイオマスに優れていたのである。北海道と本州をつなぐ北奥の一大勢力・南部氏が、この豊かな生態系を見逃すとは考えにくい。

さらに、最近、北海道太平洋側・胆振日高地方のもう一つの資源として、金に注目する見解が発表されている。<sup>(29)</sup> 南部氏は、応永二十五年（一四一八）室町幕府四代将軍・足利義持に金を献上している（『看聞日記』）。東北の産金地で著名なのは、今の宮城県北部から岩手県南部にかけての奥羽山脈や北上山地に沿った地域で、金鉱開発は奈良時代に遡る。<sup>(30)</sup> 『庭訓往来』にも「奥州金」がみられる。「奥漆」に対し、「奥州金」とあることから、それぞれの産地は異なっていた。「奥漆」は、陸奥の奥すなわち南部氏の支配地、「奥州金」は、それより南の宮城県北部から岩手県南部の産物であろう。南部氏と檜山安東氏の係争地であった秋田県比内地方は、近世前期の国絵図のなかに多数の鉱山の存在が記録されており、金の産地である可能性が高い。<sup>(31)</sup> しかし、ここを南部氏が確実に掌握するのは江戸時代に入ってからであり、<sup>(32)</sup> 中世の段階で、自らの領内

で多くの産金が望めたかは定かでない。むしろ、北海道太平洋側との交易パイプを用いる方が、たやすく入手できたのではないか。将軍・義持に献上した金は、北海道産と推定したい。十七世紀前半には、本州からの金掘りが入り込んでいたが、<sup>(33)</sup> それを遡り中世の段階で南部氏の主導によって、金鉱開発が行われていた蓋然性は大きい。ところで、南部氏のもともとの本領の甲斐国は、金山の密集地帯で、金鉱石の製錬など新たな鉱山技術の開発によって、一大産金地となっていた。<sup>(34)</sup> 戦国大名・武田氏は、積極的に金山開発を推し進め、金資源をバックに戦国の雄となっていく。<sup>(35)</sup> そして、南部氏の成長を支えたのは、甲斐からとも下った「甲州御譜代」といわれる直臣たちであった。<sup>(36)</sup> しかも、南部氏と同様、奥州合戦のときに甲斐国から比内郡に下った浅利氏は、南北朝期に至っても、本貫地との紐帯を密にしていた。<sup>(37)</sup> おそらく、南部氏も、甲斐との間で綿密に連絡を取り合い、そうした交流のなかで、最先端の鉱山技術を有していたのではないか。さらにいえば、武田氏との間で金掘り技術者の交流があったことも想定される。

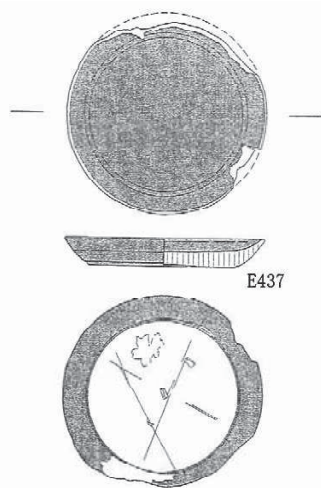
要するに、南部氏は自らの領内のアイヌを介しつつ、鷹・鹿・金などの豊富な資源のある北海道太平洋側へ進出していたのである。漆碗などとの引き換えに得たこれらの特産物が、中世南部氏の権力基盤の一つになっていたのである。

## 二、本州アイヌの淵源

### (一) 津軽エゾの蜂起

では、南部氏と本州アイヌとの関係は、いつまで遡れるであろうか。南部氏を起点とする太平洋ルートは、いつから形成されたのだろうか。

文永五年（一二六八）津軽でエゾが蜂起し、安藤五郎を殺害した。安藤氏は、かつて陸奥奥六郡に勢威を奮った安倍氏の子孫を自称し、エゾと密接な系図を作成していた。自らをエゾの棟梁とした系譜意識によって、エゾ支配の正当性を高めた<sup>38</sup>。鎌倉時代後半あたりから、北海道産の鮭や昆布の日本海への海運を利用した流通が活発になり、積荷の中継点である津軽は、交易拠点として一段と賑わいをみせていた<sup>39</sup>。安藤氏は、北奥から北海道に君臨する「日の本將軍」を名乗り、津軽エゾを統率することによって、北日本海交通を掌握したのである<sup>40</sup>。こうした状況をふまえて、鎌倉幕府は、安藤氏に「蝦夷沙汰代官」職を与え、エゾの統率と津軽における北方交易の権限を委任した。安藤五郎もその任務に就いていたとみて差し支えない<sup>41</sup>。従って、津軽エゾによる安藤五郎の殺害は、両者の間で、北方交易をめぐる何らかのトラブルがあったことを推察させる。前述のように、渡党に該当する道南のアイヌが、交易活動のため「津軽外浜」まで出向いていた。外ヶ浜の付近には、渡党に呼応し、便宜を図る集団が存在したであろう。彼・彼女らが、本州アイヌであったと受け止められる。中世の後半には、陸奥湾の最深部・外ヶ浜のほぼ中心に、日本海航路の終点として、油川湊が栄えた。また遡って、古代末期から中世にかけて、この場所には、巨大な遺跡群・石江遺跡群が営まれた。石江遺跡群は、二〇〇三年度から始まった東北新幹線新青森駅建設及び周辺の土地区画整理事業の予定地に所在する遺跡で、新田（1）（2）遺跡、高間（1）（6）遺跡、新城平岡（2）（4）（5）遺跡の



〈図2〉高間(1)遺跡底部刻印漆器

総称である<sup>42</sup>。そのなかの高間（1）遺跡では、鎌倉時代にあたる遺物とともに、底部に何らかの印の刻まれた漆器が出土している<sup>43</sup>（図2）。漆器の年代は十三世紀後半から十四世紀前半のもので、「X」の変形バージョン

を思わせ、洲崎遺跡の漆器を彷彿とさせ、渡党や本州アイヌの津軽での活動を裏付けるものとして興味深い。安藤五郎を殺害した津軽エゾのまわりには、渡党の一味である本州アイヌの姿があったことはほぼ確実である。後ほど述べるように、渡党と本州アイヌは、十世紀から十一世紀に道南から南下した擦文人の後裔で、出身母体は同じであった。

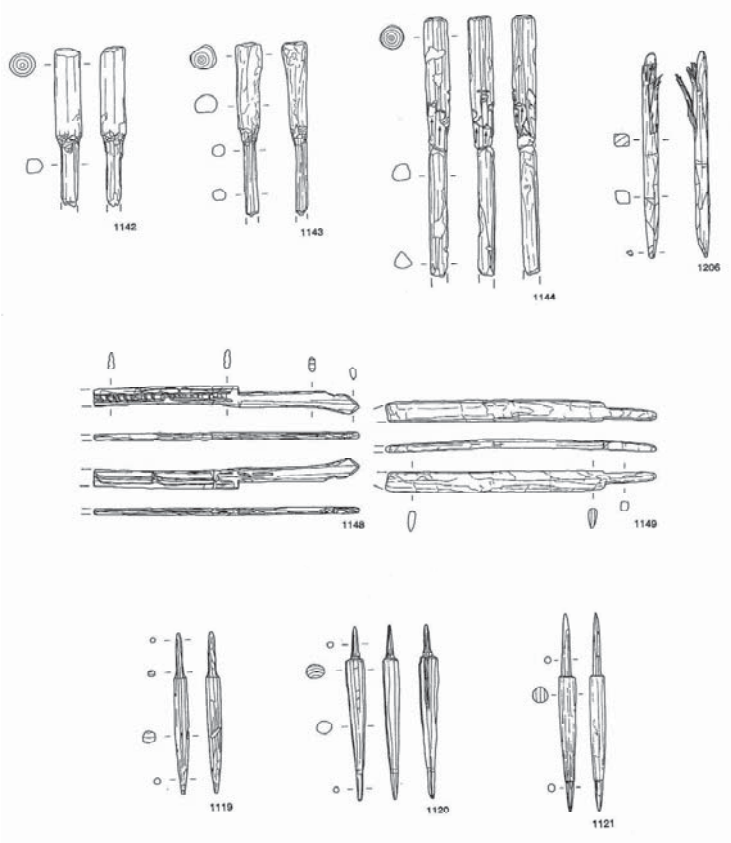
いずれにしても、津軽エゾの蜂起は、安藤五郎との交易上のトラブルを発端とし、それに本州アイヌが加わった可能性は高い。なお、エゾの反乱はこののちも止まず、正応二年（一二三〇）から元亨二年（一二三二）には出羽のエゾにも飛び火、さらには安藤氏の内紛とも結びついていく。このころ中世アイヌは、『絵詞』で唐子にあたる集団が、貴族・武士など日本列島の権力者が渴望する毛皮類を求めてサハリンへの跋扈を一層強める。サハリンでは現地住民との諍いがモンゴル帝国の介入を招き、元の大軍との間で戦闘が繰り広げられた。アイヌの毒矢を使った攻撃は元軍を大いに悩ませ、サハリンからは元の勢力を一掃することに

成功する<sup>(4)</sup>。サハリンで唐子が獲得した毛皮は、渡党を介して、外ヶ浜で取引されたのであろう。唐子・渡党は、習俗などに相違はあったとしても、北日本海の交易を介して、緊密な関係をもっていた。従って、渡党のアイデンティティは、サハリンまでを視界に入れた北方交通によって醸成されていたとみるのが妥当であろう。サハリンでの特産物の入手と外ヶ浜における交易は、中世アイヌの社会・文化にとって大きなウエイトを占めるものであった。とすると、外ヶ浜を管理・運営する安藤氏の内紛は、中世アイヌにとって死活問題であった。それと北からのモンゴル襲来が相まって、唐子・渡党・津軽エゾ・出羽エゾといった北日本海の交易集団の絆が一時的に強まったことも想像できる。渡党は、外ヶ浜の交易が滞ったために出羽北部まで南下し、さらに下北半島や太平洋側へも進出し、南部氏との関係を持ち始めたのではないか。それに伴い、外ヶ浜付近の本州アイヌも、南部氏の領域へと移住したのであろう。まさしく、南部氏が師行のもと勢力を伸張させていくときとほぼ一致する。聖寿寺館の骨角器は、十四世紀後半の年代が与えられている。ここでは、南部氏と本州アイヌとの関係は十四世紀前半まで遡れること、そののち時を経ずして、聖寿寺館の近くに土着・移住したアイヌがいたことを指摘したい。さらにいえば、南部氏を起点とする北奥から北海道の太平洋沿岸ルートも、このころ確立されたのであろう。

(二) イナウの源流

さて、本州アイヌは、いつから津軽へ土着したのであろうか。そこで、『絵詞』にみえる渡党の習俗のなかに、婦人が、「木を削て幣帛」状の

ものを使って天に誦呪するとあることに着目したい。この幣帛は、アイヌの祭具の一つのイナウのことである。ここでは、渡党や本州アイヌの淵源を特定するための前段階の作業として、北海道の中世アイヌ期・擦文後期の遺跡と古代末期の津軽における発掘成果を参照することで、木製祭祀具の加工技法や宗教観念という側面からイナウの源流を辿りたい。イナウは、一本の木の棒を削り出すことによって作られる。神(カムイ)と人間の関係を取り持つものとされ、アイヌの人々が神に祈る際に、供物として捧げられる<sup>(5)</sup>。中世から近世初頭の北海道アイヌの生活具を漂わせる千歳市美々8遺跡では、漆器や棒酒箸などとともにイナウと認め



〈図3〉美々8遺跡イナウ・削り出し(上)、刀形(中)、鎌形(下)

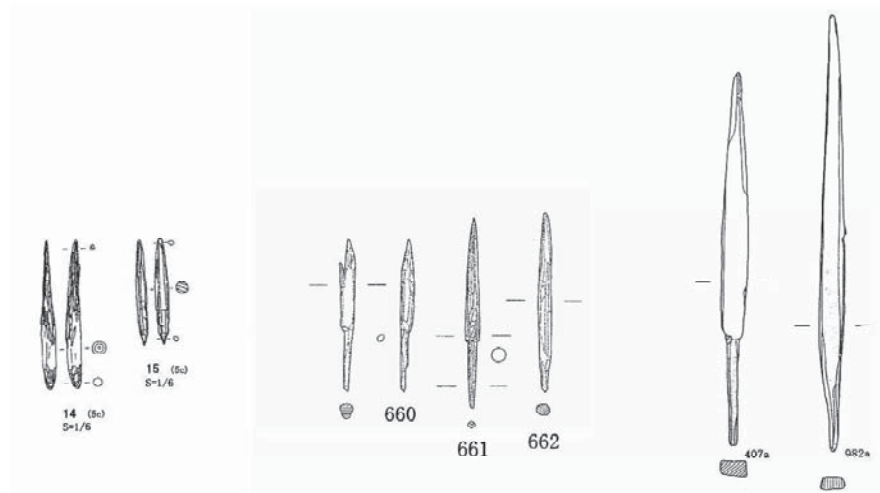
られる木製品が検出されている(図3)。これは、上端が平坦に加工された頭部があり、その直下に、下方から上方に向かって長く何度も削った刃物痕やササクレ痕が確認できるといふ。ただし、削りかけ部分は、土中で腐朽してしまったため、痕部だけが残っている。また、ピン状木製品に分類されたなかにも、削りかけや両端または片側に尖端部が認められるものがある。さらに、刀や鏃の形代を思わせる木製品が出土しており、本州の倭人の観念・信仰を受け継ぐ祭祀遺物として興味深い。美々8遺跡は勇払川やウトナイ湖を介して、現在の苫小牧から石狩あたりを結ぶ「ユウフツ越え」ルートの太平洋側への窓口に位置する。担い手たちは、『絵詞』の日ノ本の後裔であろう。美々8遺跡は十六世紀から十七世紀前半に最盛期を迎える。従って、イナウは、道南の渡党のみではなく、日ノ本などにも普及した中世アイヌを象徴する祭祀具であった。さらに、時期を遡り、札幌市K39遺跡では、八世紀後半以降、継続して木製品が出土している。そこには、本州から搬入された曲物・箸・竪杵などと、矢中柄・矢筒・銚先などアイヌの生業を感じさせるものが共存する。これらは、美々8遺跡の中世アイヌの木製品と遜色ない。しかも、刀子・手斧などが見つかっている。こうした金属器は、多彩な木製品の作製・加工のために用いられた。イナウの削り出しの技法は、金属器の普及とともに、徐々にアイヌ社会へ浸透していったことも推測される。これらの出土資料は、擦文後期あたりから木製品の加工技術などの面でアイヌにつながる素地ができあがっていたこと、中世にかけて、アイヌ文化を彩る様々な木製品が作られ定着したことを示唆する。出土木製品の分析から、北海道のアイヌは、擦文後期から中世アイヌ期にか

て、ほとんど同じ種類の木製品を用いて、生活・文化を営んでいたとする指摘さえある。イナウと並ぶアイヌの重要な祭具である捧酒箸も、擦文後期に出現する。K39遺跡の人々は、擦文に由来する生活のなかに本州の要素を取り入れながら、新たなアイヌ文化を形成しつつあった。彼・彼女らがイナウに相当する木製品を製作し、祭祀・儀礼を行っていた蓋然性は高い。

ちなみに、木製品の加工に用いる金属器は、古代末期の津軽で盛んに生産されており、その一部が北海道へも供給されたことが明かされている。K39遺跡の刀子・手斧も、津軽で生産されたものであろう。つまり、アイヌ文化において多彩な木製品が創られたきっかけの一つに、擦文後期における津軽との交流があったと想像できる。例えば、K39遺跡では鏃形の未成品が検出されている。通常、鏃形は、上端を先細らせて刃部とし、下半は細く削り出して基部とする。鏃形の削り出しは、下方から上方に向かうもので、イナウと同じである。鏃形木製品は、新田(1)遺跡・五所川原市十三盛遺跡など、津軽でも発見されている(図4)。しかもこれらの遺跡からは、鏃形のみではなく、斎串・馬形・刀形などの木製祭祀具や多種多彩に加工された木製品が見つかっている。当時の津軽の人々は、金属器を用いながら、高度な木製品の加工技術を有しており、擦文後期の木製品のモデルがあつたとみるべきであろう。そうした技法の一つに、削り出しもあつたと思われる。とすると、イナウは、津軽で育まれた木製品の加工技術を応用して発案されたのではないか。あるいは、イナウのモデルとなるような木製品が、津軽にあつたと捉えるのが妥当であろう。発掘成果に注目しつつ、加工技法や精神文化の面か



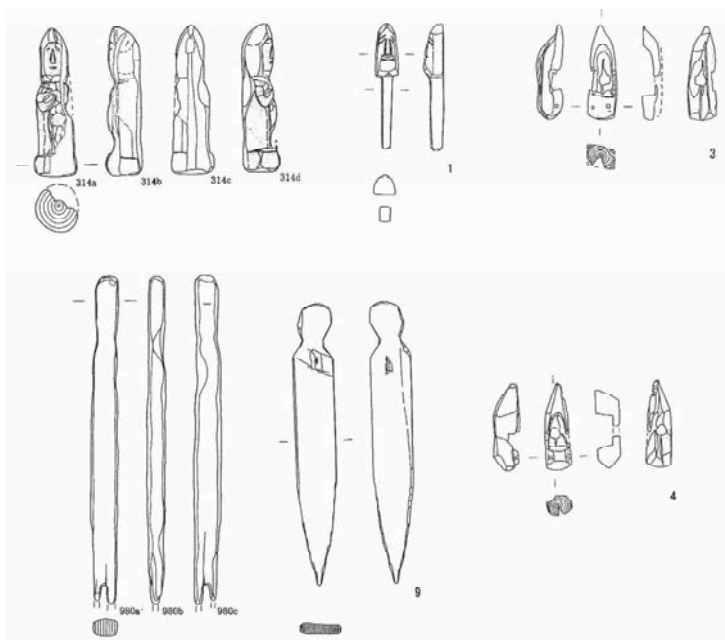
れる。<sup>(55)</sup>「忌札見知可」と記された物忌札は、穢れや葬送に関わるものとされ、都や関東以南の官衙関連遺跡で出土する例が多い。<sup>(56)</sup>檜扇も、東北では陸奥国府の多賀城面前の市川橋遺跡や秋田城東門外の鶴ノ木地区など、城柵官衙に特徴的な遺物である。九世紀以降の城柵では、人面墨書土器や人形・斎串・刀形・馬形などの木製祭祀具を用いて、陰陽道に基づく境界祭祀が行われていた。<sup>(57)</sup>しかも、このころ、鎮守府將軍や王臣家



〈図4〉 K39遺跡(左)、新田(1)遺跡(中)、十三盛遺跡(右) 鏃形木製品

らこの仮説を深めていく。石江遺跡群では、新田(1)遺跡を中心に、斎串・刀形・馬形・鏃形などの木製祭祀具や檜扇・物忌札、男性神像、仏像の光背など仏教関連物、両端に切込みの入られた木筒状木製品、下駄・菰槌・鋤・堅杵・紡織具といった生活用具などの木製品が出土している。これらは、地元を生えるアスナロを原材料としており、遺跡周辺で製作・加工されている。年輪年代は、十一世紀前半とさ

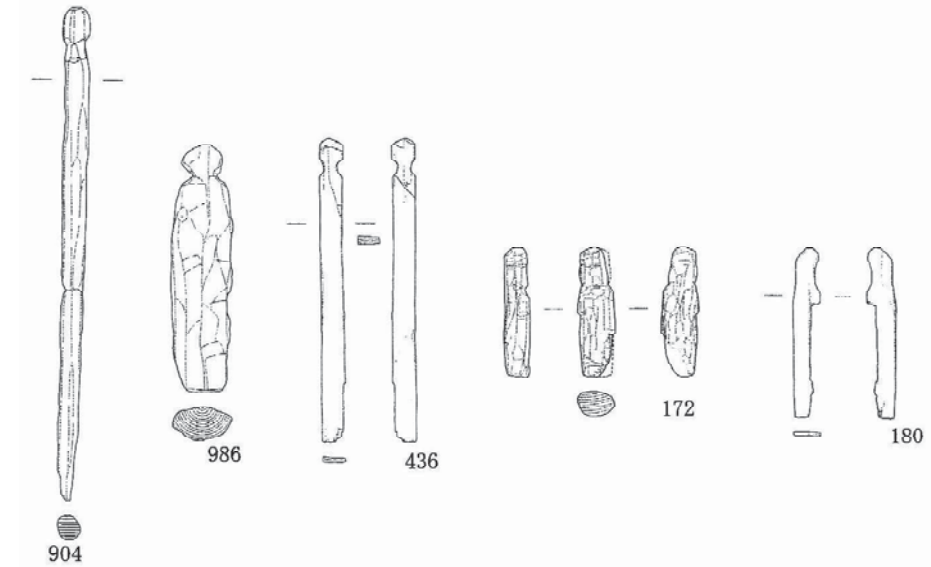
から平安貴族へ、津軽を経由した北方産物が貢納されており、都や城柵から発信される観念をもつ人々が、交易のために遺跡周辺を訪れていた。新田(1)遺跡の祭祀・信仰にかかわる遺物や取り巻く交通を総合すると、そうした境界観が伝播していたことは否めない。<sup>(58)</sup>地元産の木材で祭祀具が作られていることや人形が欠如している点に注目して、城柵からの精神的影響に否定的な見方もある。<sup>(59)</sup>しかしながら、仮に、地元の人々が城柵にまつわる宗教観念を拒んだとすると、木製祭祀具は南から訪れた人々が持参するべきではないか。むしろ地元で作られているという事実こそ、津軽の人々が城柵周辺の観念を自らの習俗として受容したことを示すと理解



〈図5〉 十三盛遺跡人形木製品

を示すと理解したい。さらに、昨年(二〇〇一年)報告書が刊行された五所川原市十三盛遺跡では、石江遺跡群ではないと断定された人形が見つかったという<sup>(60)</sup>。〈図5〉。棒状の材の一

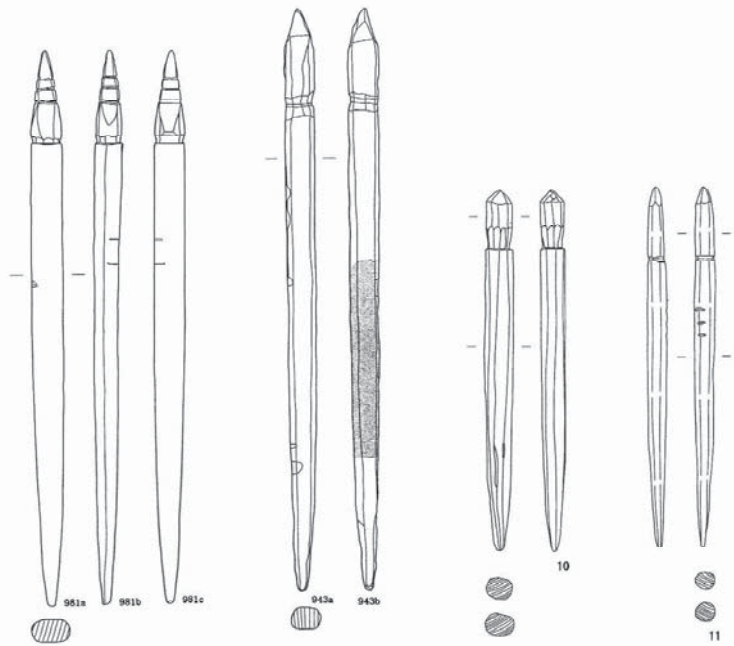
端に人の眉・目・鼻・口を粗く彫刻して人の頭部を表現したもの、上端側面に抉りが入り下部は二股に分かれるものなど、いろいろな加工の施された人形である。また、上部は人頭状に丸く、下端部は尖っている人形と齋串のあいの子のようなものもある（県報告書では齋串に分類）。もちろん、齋串・刀形・馬形・鏃形などの木製祭祀具、檜扇などの服飾具、箸・曲物・下駄・鍬・鋤・杵などの生活用具も出土している。両端に切込みの入った木筒状木製品もみられる。十三盛遺跡をふまえて、新田(1)遺跡の木製品をみてみると、上部を人頭状に丸くしたものなどは、人形と捉えても可能ではないか（図6）。従って、古代末期の津軽には、人形を含めた倭系の木製祭祀



〈図6〉新田(1)遺跡人形状木製品

具全般が流入していたとみるべきであろう。穢れを背負って流された人形は、陰陽道に因む境界観が津軽の地に伝播していたという確かな証拠となる。なお、石江遺跡群の担当者が、その成果を総括した二〇一四年二月刊行、青森市教育委員会『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』では、十三盛遺跡の人の顔を象った木製品（図5）上・右下）を、神像ないし仏像と評価する。しかし、下部が二股に分かれているもの（図5）左下）などには、言及がない。後者は、人形に近いとみるべきであろう。いずれにしても、石江遺跡群・十三盛遺跡の木製祭祀具を検証し、人形の有無を判断する作業は、今後、研究者間で共有すべき課題となろう。そして、馬形などの形代は、神を祭るときに、神への供献品や祓えの具として用いられた<sup>④</sup>。刀形・鏃形は、罪を殲滅する武具であった<sup>⑤</sup>。齋串は、神の招き代として地上に立てられた細長い板で、結界や神への供物のしるしなどの意味をもつ<sup>⑥</sup>。繰り返すように、新田(1)遺跡の周辺は、のちの外ヶ浜に該当し、本州と北方世界をつなぐ接点にあたる。つまり、祭祀には、北方交易の拠点として機能したかつての秋田城などで行われたものと同じ価値が求められた。津軽では、人形とこれらの木製祭祀具を組み合わせることによって、北からの人々がもたらす疫神や交易に伴う異文化接触のときの穢れを祓うための祭祀が催されたのである。なお、刀形は、五城目町中谷地遺跡や盛岡市飯岡林崎遺跡、能代市樋口遺跡など、九世紀以降の北奥羽の在地首長の本拠の祭祀に特徴的なもので、境界祭祀が城柵から北の地へ徐々に伝播していったことを意味する重要な祭祀具である<sup>⑦</sup>。

こうした様々な木製祭祀具のなかで、十三盛遺跡で出土した有頭串が



〈図7〉十三盛遺跡有頭串

イナウとの関係  
 連を連想させる。有頭串には、上端部を有頭状に削り出して、下端部を細長く尖らせたものや上端部を円錐状に作り出して、円錐部に横走沈線を施すものなどがある（図7）。  
 イナウとの比

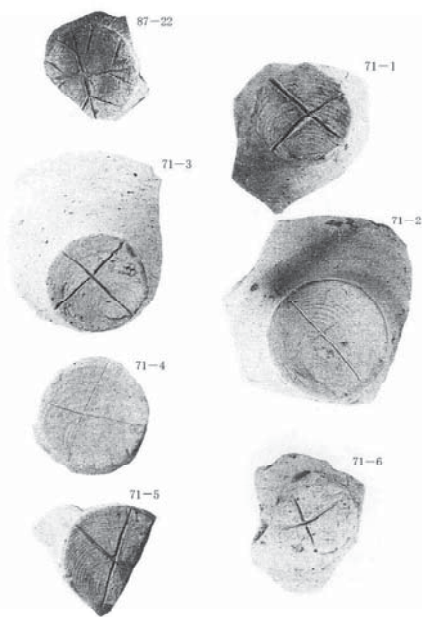
較という点において、上端部は、平坦ではないところがやや異なるが、削り出すという点は共通する。また、尖らせた下端部を突き刺して立てて使われることも同じである。後者は、斎串とも類似しており、斎串の変形バージョンとも捉えられる。とすると、「斎串→有頭串→イナウ」という変化を辿れるのではないか。また、多彩な木製祭祀具のなかには、神の依代や祓えの具として用いられるものがある。イナウの基本的機能は、人と神との仲介を果たすことで、依代に近いであろうか。要するにイナウは、古代末期の津軽で頻繁にみられる木製祭祀具に技術的・観念

的に近く、斎串や有頭串との関係がとりわけ深いと考えられる。しかも、津軽の木製祭祀具は十世紀から十一世紀の所産であり、K39遺跡など北海道に木製品が普及する擦文後期とほぼ一致する。ただし、津軽からK39遺跡のある道央まで一足飛びに文化伝播するとは考えにくい。そこで、両地域の文化をつなぐ集団として、再び道南の渡党の存在がクローズアップされる。

### （三）本州アイヌ文化の形成

新田（一）遺跡・十三盛遺跡が最盛期を迎えるころ、岩木川流域や陸奥湾一帯の大多数の遺跡で擦文土器が出土することに注意したい。津軽の擦文土器は北海道からの搬入品のみではなく、地元でも作られている。つがる市石上神社遺跡では、底部に刻印をもつ擦文土器の壺が出土している（図8）。壺の底部に刻印の施された擦文土器は、日本海沿岸を道

北まで広がり、この一帯の集団が共通の祖先を戴いたことを示すものとされる。ただし、道南と道北は、それぞれ異

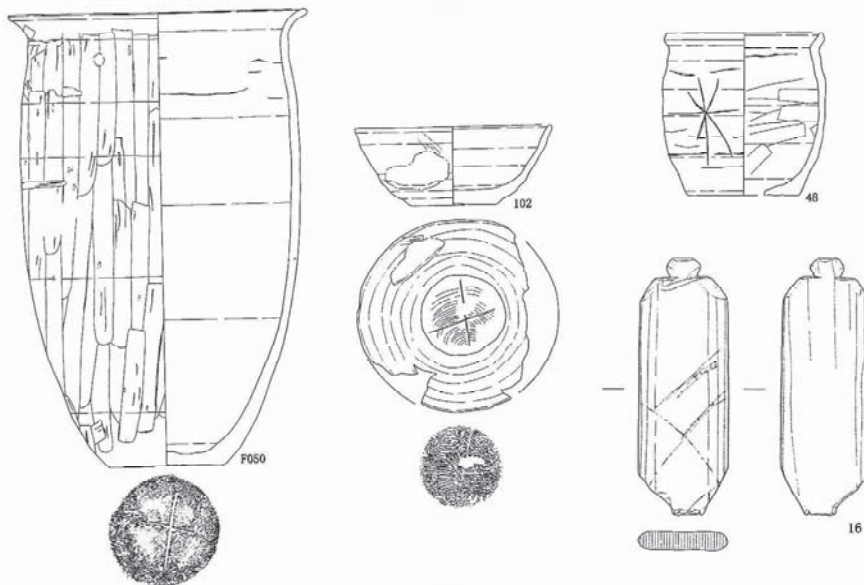


〈図8〉石上神社遺跡底部刻印擦文土器  
 （左上「※」・土師器「×」）



〈図9〉十三盛遺跡底部刻印土器(上)・漆器(左下)  
「×」土錐(下中)・「×」木製品(右下)

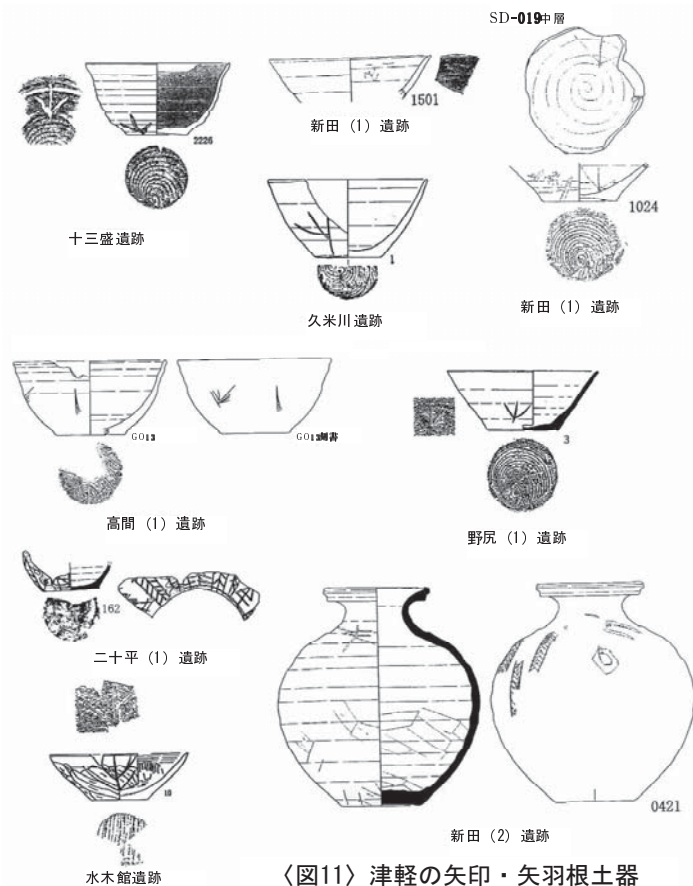
なる固有のモチーフをもっていた。石上神社の刻印擦文壺は、奥尻島青苗遺跡や松前町札前遺跡など、道南に濃密に分布するパターンと同じものである<sup>(8)</sup>。この道南型刻印土器の分布域は、のちの渡党の活動域とも重なっていく<sup>(9)</sup>。つまり、古代末期の津軽には、渡党の前身となる道南の擦文人が、土着・移住していたと理解できる。さらに、同じ石上神社遺跡では、底部に「×」印を刻んだ土師器杯が多数出土している(図8)。



〈図10〉高間(1)遺跡底部刻印土器(左)  
新城平岡(4)遺跡底部刻印土器(中)・「\*」甕・「×」木製品(右)

同様に、十三盛遺跡では、底部に「×」という刻印記号のある土師器や「×」印の付いた土錐・用途不明木製品が見つかっている(図9)。新城平岡(4)遺跡でも、体部外面に「米」と刻まれた土師器甕や底部に「×」印のある土師器杯がある<sup>(10)</sup>。高間(1)遺跡でも、底部に「×」とヘラ書きされた甕がある(図10)。九世紀以前の擦文土器に「×」印を刻む例はほとんどないため、底部刻印土器は、須恵器・土師器のヘラ記号の影響を受けたとの指摘がある<sup>(11)</sup>。とすると、その発信地は、津軽であったと推測できる。津軽に土着・移住した道南の擦文人は、在地の人々との交流の果てに、須恵器・土師器に刻まれた「×」印などの記号を学び、自らの習俗へと転化していったのであろう。さ

その発信地は、津軽であったと推測できる。津軽に土着・移住した道南の擦文人は、在地の人々との交流の果てに、須恵器・土師器に刻まれた「×」印などの記号を学び、自らの習俗へと転化していったのであろう。さ



〈図11〉津軽の矢印・矢羽根土器

らに、底部刻印の捺文碗は、アイヌの飲酒儀礼のときに捧酒箸とともに用いられた、祖印の付けられた漆器の原型となるものともいわれる。この見解に従うのならば、イナウトともに、漆器に祖印を付けるという発想のモデルも津軽にあったと捉えられる。あるいは、木製祭祀具や刻書土器を組み合わせるなどして、飲酒儀礼そのもののモデルもあったかもしれない。

その反面、古代末期の津軽で出土する矢印土器は、北海道より北の人々の固有信仰を示すものとして、興味深い。矢印の線刻の施された土器は、十三盛遺跡、藤崎町水木館遺跡、つがる市久米川遺跡、青森市野尻

(1) 遺跡・新田 (1) 遺跡・新田 (2) 遺跡、野辺地町二十平 (1) 遺跡などでみられ、矢印が連なり、矢羽根の模様を呈するものもある<sup>(26)</sup>。新田 (2) 遺跡のものは、須恵器広口壺に「夫」の刻字、三本の矢羽根状の絵、「◎」の記号が刻まれている。矢羽根と的を表現したもので、神前で射礼が奉納された様子を描いたとも憶測される。本州では、矢羽根状の土器は、縄文時代から弥生時代にかけてみられ、神への供献品である鹿などを狩猟する行為を象徴している<sup>(27)</sup>。ただし、古墳時代以降ほとんど出土せず、古代末期の津軽において復活する。他方、北奥の太平洋側から北海道の道央低地帯には、八戸市殿見遺跡・岩ノ沢平遺跡、千歳市美々8遺跡、余市町大川遺跡などで、矢印の模様をもつ坏が出土している<sup>(28)</sup>。そもそも七世紀から八世紀には、八戸周辺と道央低地帯を結ぶ太平洋側の交通が親密で、捺文文化の成立に大きな役割を果たした<sup>(29)</sup>。両地域の集団が、共通の祭祀・観念をもっていた可能性は高い。また、美々8遺跡や大川遺跡の矢印は、ロクロ土器器に刻まれたものである。ロクロは北海道では検出されていない<sup>(30)</sup>。従って、矢印は、本州から搬入されたのち刻まれたのであろう。捺文社会は、本州からの農耕文化を部分的に受容しつつも、狩猟・採集を基盤としていた。そうした生業をもつ彼・彼女らは、自然に対する強い畏敬の念を抱いていたに相違ない。美々8遺跡の矢印土器も水場で出土している。従って、矢印土器は、捺文人の生業を象徴する宗教観念を端的に表しているよう。自らの習俗に因むモチーフを付けることによって、本州から搬入された土器は「私達の」「私の」器になったとも推測される<sup>(31)</sup>。そうした行為は、のちのアイヌのイトクパにもつながる発想であろう。美々8遺跡では、

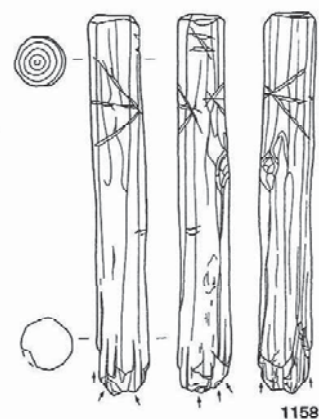
矢印の模様の刻まれた中世アイヌ期の木製祭祀具が出土している（図13）。さらに、矢印模様は、アムール川流域のトロイツコエ墓群の馬の趾骨や渤海の都・上京龍泉府の陶質土器などにも刻まれている（図12）、矢印土器について、北海道より北のシベリアやユーラシア大陸に広がる



〈図12〉 津軽周辺の矢印・矢羽根資料

続縄文期の余市町フゴツペ洞窟の岩面壁画にもみられる。矢印模様は、北海道の人々が連綿として受け継いできたモチーフであり、そこに在来の宗教観念が表現されているのであろう。九世紀以降、擦文土器の文様は複雑化していき、多様化したなかに綾杉文という矢羽根を思わせるものが創られる。この綾杉文も、矢印記号と同様、擦文人の生業と信仰を表現したものであろう。しかも、水木館遺跡・十三盛遺跡など津軽の矢印土器も、水場での出土例が多い。従って、これらは、移住した道南の擦文人がもたらし、在地の人々から入手した土器に対して自らの習俗に因んだモチーフを付けたと捉えられる。新田（1）遺跡では、鏃とされるヤス状の骨角器が出土しており、移住した擦文人の生業を見つめるうえで示唆的である。また、新田（2）遺跡や二十平（1）遺跡の矢印は、五所川原産須恵器に付けられている。普通、須恵器の線刻記号は、焼成前に刻まれる。とすると、この須恵器は、擦文人のニーズに合わせて作られたのであろう。五所川原では、津軽に暮らす擦文人に向けた須恵器の生産も行われていた。

新田（1）遺跡や十三盛遺跡では、木製祭祀具や底部刻印土器と矢印



〈図13〉 美々8遺跡矢印模様  
木製祭祀具（アイヌ期）

狩猟・漁撈社会の人々の文化との関連を憶測する見解もある<sup>(81)</sup>。時期を遡り、矢印土器は、擦文文化前半・八世紀中葉の千歳市キウス9遺跡からも出土し<sup>(82)</sup>、この模様と酷似した矢印は

土器が共伴している。道南から南下した擦文人は、木製品の加工技術、それを用いた祭祀・信仰を目的にしたりしたはずである。彼・彼女らは、本州を源泉とする信仰を学び、自らの宗教観念に取り入れたのであろう。そして、北海道へ持ち帰った人々がこのち渡党として躍動し、津軽にそのまま居残り定着したものが本州アイヌになっていくと考えられる。十世紀以降、北海道内でも擦文人は、各地の環境・生態に適應しつつ、大規模な対外交易に依存する経済・社会へと深化を遂げ、アイヌへと至る精神文化を身に付けていく<sup>(84)</sup>という。津軽の擦文人が北海道よりも先駆けてアイヌ文化を営むとする指摘もあるが、のちの渡党につながる道南・津軽の擦文人が一体となって、アイヌへの道を切り開いたとみるべきであろう。いずれにしても、擦文人にとって、津軽における交流は、交易による単なる経済的側面のみではなく、精神的にも大きな影響を与え、アイヌ文化への道筋の鍵となっていくのである。さらに、十二世紀後半から十三世紀前半にかけて、新田(1)遺跡では多くのかわらけが出土し、四面底をめぐらし寝殿造の塗籠に匹敵する内部構造をもつ領主屋敷が形成される。高間(1)遺跡では、寛喜三年(一一三二)の紀年銘をもつ笹塔婆が出土している<sup>(85)</sup>。新城平岡(4)遺跡でも、「十三仏」「十三神」などと記された笹塔婆が見つかっている。鎌倉時代にかけて、石江遺跡群周辺が、まさに北方交易の拠点・外ヶ浜の一角を占めていたことが窺われる。その周囲には、安藤氏や津軽エゾと密接にかかわり、渡党とつながる本州アイヌが居住していたことは疑いない。そして、十四世紀前半の安藤氏の内紛に伴い、彼・彼女らの一部が太平洋側へ移住し、南部氏と関係を結び、配下となっていたのである。

いずれにしても、渡党の「木を削て幣帛」状のものを使って天に誦呪するという習俗は、古代末期の津軽の祭祀・信仰の影響を多分に受けたこと、これ以降中世にかけて津軽には渡党と同様の習俗をもつ集団が存在したこと、彼・彼女らが本州アイヌの淵源となっていくと理解できる。

### 三、津軽エゾの成立

#### (一) 津軽蝦夷から津軽エゾへ

さて、古代末期の津軽に住み着き、そのち本州アイヌとなっていく集団は、本州と北海道をつなぐ中世の北方交易の架橋となっていく。一方、十三世紀後半から十四世紀前半にかけて、鎌倉幕府の首脳部は、蜂起したエゾ降伏の祈禱を行うとき、「五壇護摩法」という元寇のときと同じ方法を採用している(『鶴岡社務記録』)。つまり、幕府は、エゾの背後に見え隠れした本州アイヌや渡党を、異民族として認識していた。

では、津軽エゾとは、どのような集団なのだろうか。古代まで遡ると、『日本書紀』以下の『六国史』には、津軽蝦夷の記録が残されている。津軽蝦夷から津軽エゾへの転換点はどこに求められるか。両者の違いは、何なのか。この点から津軽エゾの実体に迫りたい。

〈史料一〉『日本書紀』斉明元年(六五五)七月己卯条

於難波朝、饗北<sup>二</sup>北<sup>一</sup>、越<sup>二</sup>蝦夷九十九人、東<sup>二</sup>東<sup>一</sup>、陸奥<sup>二</sup>蝦夷九十五人<sup>一</sup>。并設百濟調使一百五十人<sup>二</sup>。仍授<sup>二</sup>柵養蝦夷九人・津茹蝦夷六人、冠各二階<sup>一</sup>。

〔史料一〕は、津軽（苧）蝦夷の初見記事である。七世紀中葉、倭王権は越に淳足柵・磐舟柵、文献にはみられないが、陸奥にもものちの初期陸奥国府となる仙台市郡山遺跡を設置し、積極的に東北経営に乗り出す。越と陸奥から集められた蝦夷は、服属してこれらの城柵から食料の支給などを受けていた柵養蝦夷であろう。位階を授けられた柵養蝦夷は、そのなかでも首長クラスの人物であった。しかも、倭王権は、同時に朝鮮半島の百濟使にも饗宴を催している。百濟に対して蝦夷の服属を見せつけることによって、北方進出を誇示したのである。さらに、柵養蝦夷とは異なる集団として、津軽蝦夷が参上する。この直後倭王権は、阿倍比羅夫を中心とした大船団を北日本海へと派遣し、渡嶋（北海道）まで勢力を伸張させる。その際、比羅夫は、津軽に郡領を置き、「有間浜」で渡嶋蝦夷を招集して大饗する（『日本書紀』齊明四年（六五八）四月条）。「有間浜」は、現在の十三湊付近に比定できる。このとき、津軽郡大領・馬武、少領・青蒜には位階と恩賞が与えられている（『日本書紀』齊明四年七月甲申条）。彼らは津軽蝦夷の首長層であり、渡嶋蝦夷に服属を働きかけた。とすると、〔史料一〕の津軽蝦夷は、比羅夫の北航の準備段階で呼応し、自らの服属だけでなく、渡嶋蝦夷との仲介の役割も担うことを申し出たために、難波朝まで招集され、授位されたのであろう。六人のなかに、馬武と青蒜がいた可能性が高い。このときの渡嶋蝦夷の本拠は、道央の日本海側の余市付近であったことも憶測される。<sup>87</sup>ともかく、津軽蝦夷と渡嶋蝦夷は、密接な関係をもっていた。

ところで、倭王権は、齊明五年（六五九）の遣唐使において、蝦夷を同行させ、唐の皇帝に謁見させる。唐の皇帝は、遣唐使の使者に蝦夷の

風俗を問いただす。そのなかで、使者は、「蝦夷は、遠いところから都加留（津軽）・鹿・熟の三種ある」と答えている（『日本書紀』齊明五年七月戊寅条）。むろん、この問答は、唐の皇帝に対して、北方進出と蝦夷の服属をアピールするものであった。このとき同行したのは熟蝦夷だが、そうしたやり取りの過程で、遠方の集団として津軽蝦夷が出てくることは見逃せない。このことは、津軽蝦夷が七世紀中葉の北方進出の象徴として扱われていたこと、倭王権と良好な関係をもっていたことを表している。ちなみに、倭王権・古代国家は、「野代―爾薩体―都母」にもかなり早い段階から手を伸ばしている。<sup>88</sup>八世紀前半には、渡嶋津軽津司の北方探検も行われた。津司は、津軽をはじめとする日本列島北辺の港湾拠点を巡回し、オホーツク海付近まで赴いたことが推定される。<sup>89</sup>このときに津軽蝦夷の助力があったことは想像に難くない。七世紀中葉から八世紀にかけて、現在の「米代川―馬淵川」を結ぶラインから北の津軽にかけては、それより南の胆沢周辺と比べて、王権・国家側により親派な蝦夷たちが暮らしていたのであろう。

〔史料二〕『日本後紀』弘仁五年（八一四）十一月己丑条

陸奥国言、胆沢・徳丹二城、遠去<sup>90</sup>国府、孤居<sup>91</sup>塞表。城下及津軽狄俘、野心難<sup>92</sup>測。至於非常、不<sup>93</sup>可<sup>94</sup>不<sup>95</sup>備。伏望予備<sup>96</sup>糒<sup>97</sup>・塩、収<sup>98</sup>置<sup>99</sup>兩城<sup>100</sup>者。許<sup>101</sup>之。

ところが、九世紀に入り、古代国家と津軽蝦夷の関係は一変する。

〔史料三〕は、「征夷」の終焉間もないころの出来事で、津軽蝦夷は



「野心測り難し」集団として把握されている。糶・塩の備蓄された胆沢城・徳丹城は、この時点で陸奥側の最北の城柵であった。城下は両城の周辺、すなわちのちの奥六郡にあたる範囲であろう。津軽蝦夷の不穏な動きは、遠く離れた両城にも伝わり、来襲が警戒されたのである。一般に、「征夷」は胆沢地方をターゲットとしたもので、その影響はより北の津軽までは及んでいないとみられている。しかしながら、古代国家と津軽蝦夷の関係の変化を考えるうえで、「征夷」は重要なファクターである。「征夷」が、津軽蝦夷に与えたインパクトとは何なのだろうか。

そこで、「征夷」の終盤、坂上田村麻呂によって造営された志波城・徳丹城と第二次雄勝城とされる弘田柵の意味をクローズアップしたい。志波城は、外郭線の大きさ、政庁内の空間の広さ・建物群の大きさ、駐屯する鎮兵の多さなど、陸奥国府の多賀城を上回る古代東北最大の城柵であった。田村麻呂は、胆沢城よりも北に強い楔を打ち込むことによって、志波城を中心に津軽までを視野に入れた北方支配を貫徹させようとした。ところが、田村麻呂の構想は、藤原緒嗣と菅野真道の間で争われた「徳政相論」によって挫折する(『日本後紀』延暦二十四年(八〇五)十二月壬寅条)。志波城は、外郭・政庁とも半分の規模にも満たない徳丹城へと退転する。ただし、(史料二)からは、当初の徳丹城には、志波城と同じように津軽蝦夷の管轄が委ねられていたことが窺われる。しかし、徳丹城もせいぜい八三〇年代には廃絶してしまう。これ以降の北奥羽の支配は、昆布のことを指す「狄藻」と記された木簡の出土した弘田柵や八郎潟から米代川流域の大半を「城下」に治めた秋田城といった出羽側の城柵が担うこととなる。九世紀以降、津軽にも、城柵周辺の

土器様式に普遍的なロクロ土師器が浸透するなど、南の文化が徐々に広がっていく。他方、城柵で催された境界祭祀とかかわる木製祭祀具は、陸奥側では現在の盛岡周辺、出羽側では米代川流域まで分布するが、九世紀まではそれより北の津軽には見当たらない。この段階の北奥羽における木製祭祀具は、国司(城司)が蝦夷の首長の拠点に特産物などの取り立てに赴いたときに使われるもので、城柵支配と密接にかかわるものであった。津軽に木製祭祀具が見られないということは、城柵と津軽蝦夷の間で激しい駆け引きが繰り広げられていたことを暗示する。

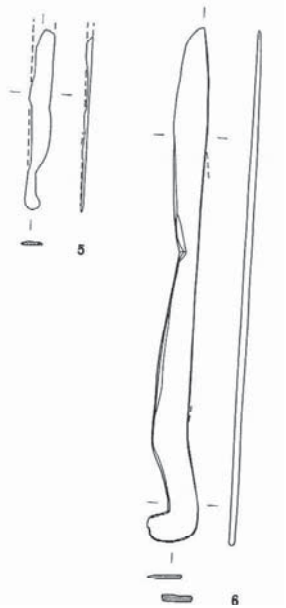
一方、かつて倭王権・古代国家が津軽蝦夷の助力なくしては行い得なかった渡嶋蝦夷との交易は、秋田城に一本化されていく。もちろん、田村麻呂のプランには、秋田城による北方交易の管理の徹底という目的も含まれていた。仮に、北日本海を南下した渡嶋蝦夷が津軽を経由地としても、彼らが欲する金属器などの文物は秋田城まで行かなければ入手できなかった。「征夷」終焉後、古代国家と渡嶋蝦夷の北方交易において、津軽蝦夷の立場は著しく低下した。彼・彼女らは、拠点である秋田城に対して、激しい嫌悪感を抱いたのではないか。「征夷」の果てに置かれた北奥羽の城柵とその役割は、津軽蝦夷に大きなプレッシャーを与え、それまでの古代国家との良好な関係を一変させたのである。

九世紀後半、古代国家との緊張感がピークとなった津軽蝦夷は、出羽北部の蝦夷が起こした元慶の乱に荷担していく。津軽蝦夷の大多数は反乱側に加わった。文献史料には、「其党多<sub>レ</sub>種、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>幾千人<sub>一</sub>。」とあり(『日本三代実録』元慶二年(八七八)七月十日条)、そうした集団が連携した姿は、古代国家に脅威にうつつたであろう。津軽蝦夷が乱に参加

した理由は、城柵を中心に据えた北方支配を打倒するためと考えられる。元慶の乱は、藤原保則や小野春風らの活躍によって鎮圧されるが、これ以降、津軽の地は大きく深化を遂げる。深化は、集落数の飛躍的な増加、鉄製品・須恵器生産の開始、木製祭祀具の使用、擦文土器の出土など、考古学の成果によって如実に表される。これらをトータルすると、それまで秋田城の周辺にあった北方交易とそれに伴う生産の拠点が、津軽へ移動したと捉えられる。このうち秋田城は衰退していくので、城柵の主導ではなく、津軽の側のイニシアチブで拠点が北上したとみるべきであろう。津軽蝦夷が、城柵周辺の技術者を招聘したことも推測される。そのうえ、津軽蝦夷の内部でも、岩木川流域と陸奥湾一帯に大きな集団が形成され、それぞれ北海道の日本海側と太平洋側に交易圏を求めていくという。しかも、津軽から北へ向かう交流は、擦文文化のサハリン・道東方面への拡大とも絡み合い、北東アジアにもつながり出す。野辺地町向田(35)遺跡で出土したガラス玉は、そうした動きと重なるものと思われる。津軽蝦夷は、活性化する北方交易を媒体として、十三湊を望む唐川城の首長を中心に、階層化の傾向を強めるという指摘さえある。新田(1)遺跡・十三盛遺跡は、まさに当該期に営まれている。要するに、津軽蝦夷は、生産・交易・祭祀などあらゆる面に変貌し、エゾとして新たなアイデンティティを見出していったのではないか。十世紀前半の天慶の乱を伝える『貞信公記抄』には、秋田城を襲撃した出羽北部の勢力のバックに「異類」がいたことが知られる。この「異類」について、蝦夷から変化を遂げた津軽や渡嶋のエゾとする見方もある。

とするならば、古代末期の津軽で行われた宗教儀礼を理解することが、

津軽蝦夷から津軽エゾへの深化を示す重要なメルクマールとなるであろう。そもそも、北日本海沿岸を北航した阿倍比羅夫は、饗宴を催すときに「彼地神」を祭っている(『日本書紀』斉明五年三月是月条)。この神は、海岸沿いの自然神に由来するものであった。津軽蝦夷は自然神、アニミズムに基づく固有信仰を有していた。それにプラスアルファして、津軽エゾの世界には、陰陽道の境界観や狩猟民の矢印モチーフなど南と北のより幅広い観念が伝わっている。例えば、十三盛遺跡などで出土する刀形には、蕨手刀を模した柄をもつものがある。蕨手刀は、八世紀前後の北奥羽の首長墓(末期古墳)の副葬品として著名である。蕨手を模した刀形は、倭系と地元信仰が融合した祭祀具と解釈できよう(図14)。蝦夷からエゾへと深化する在地の集団と、国司や王臣家の配下の人々・南下した擦文人による交流によって生まれた複雑に宗教混合した祭祀形態こそが、津軽エゾの宗教観念と考えられる。彼・彼女らは、元だけではなく、平安後期の日本の国家や北東アジアにつながる人々を巻き込んだ、宗教観念の受容をめぐる複雑な絡み合いによる葛藤の果てに、アイデンティティを確立していったのであろう。そして、延久二年(一一七〇)合戦を記した「前陸奥守源頼俊款条案」には、「衣曾別嶋(えぞのわけしま)が登場し、十一世紀後半までに、都でもエゾの姿がはつきり



〈図14〉十三盛遺跡出土 蕨手を模した刀形

と認識される。ともあれ、こうした宗教観念をめぐる相克は、古代末期の津軽が平安後期の日本の国家と北東アジアの接点となり、両者の対峙する場となっていたことを示唆する。蝦夷からエゾへ深化するにあたり、津軽の人々は、自らの足場を古代国家のみに置くのではなく、より北東アジアへ開かれた集団へと変貌を遂げたのである。

## (二) 津軽エゾと北東アジア

こうして、古代末期の津軽における複合的な宗教儀礼を認めようとして、なお、倭系の木製祭祀具が、ひととき目立つのである。新田(一)遺跡の評価を再考することによって、倭系の木製祭祀具を用いた境界祭祀の歴史的意義を考えたい。

繰り返すが、発掘当初から脚光を浴びたこの遺跡は、多彩な出土遺物から北奥の一大拠点であったことが示され、国家の出先機関ともいわれ、担い手はプロト奥大道を通して、鎮守府胆沢城と密接につながっていると推測された。ただし、これらの見解は発掘担当者の頭越しに出されたものであり、フライング的な面があったことは否めず、担当者らとの間に感情的な対立を生むこととなる。そののち、担当者の意向を汲んだ研究会が結成され、遺跡の性格について再検討が行われた。しかし、ここでの議論は、いわば国家の拠点なのか在地の拠点なのかという点に終始し、津軽から平安後期の日本、さらには北東アジアを見つめることには至らなかった。前述したように、石江遺跡群以降に発掘された十三盛遺跡の出現によって、人形のないことを一点張りにした担当者たちの主張は成立しない。むしろ、多様な信仰のなかで、なぜ、倭系の木製祭祀具

が普及したのかということが大きな問題なのではないか。これらを用いる直接の原因となる穢れは、サハリンや道東方面に進出し、北東アジアへもつながる交易活動を展開した擦文人がもたらすものであった。さらに、そうした視角からは、火焰光背・供養具などの仏教系遺物にも、関心がそえられる。九世紀以降の北奥羽には、様々な仏教に関する痕跡が窺われるが、城柵周辺の辺境鎮護の思想に、修験道・観音信仰などが混ざりつつ、徐々に北上し、津軽まで到達する。ひとまず、仏教系遺物も、境界観とのかかわりで捉えたい。すでに、十世紀前半の平将門の乱のとき、古代国家は将門を筆頭とする関東の人々が奥羽の蝦夷と連携し、さらに契丹の勃興などに顕れる北東アジアの変動と連動することへの危機を抱いている。つまり、木製祭祀具を用いた陰陽道の境界観が如実に顕れる祭祀は、古代国家の支配者層が抱いていた、日本列島の北辺と北東アジアが結びつくことへの警戒心を示すものであろう。要するに、新田(一)遺跡を再評価するにあたり、津軽という一つの在地社会を国家と対立するものと捉えるのではなく、北東アジアに連なるという視角から見つめ直すべきなのではないか。

そこで、新田(一)遺跡で倭系の木製祭祀具が使われたのとはほぼ同じとき、平安京では、時の権力者・藤原道長が来日した唐(宋)僧念救の天台山への帰国にあたり、「奥州貂裘」を与えていることが注目される。

〈史料三〉『御堂関白記』長和四年(一〇一五)七月十五日条

十五日壬戌、唐僧念救帰朝。従唐天台山所求作料物送之。(中略)

付「念救」書様

日本国左大臣家

施送

(中略)

奥州貂裘参領 《長二領、一領》

(中略)

砂金佰両 《入蒔絵丸筥》

(中略)

右依「大宋国天台山大慈院伝疏」、施送如件。

長和四年七月七日

知家事右衛門府生従七位上秦忌寸貞澄

令従五位下行修理少進良峯朝臣行政

従大主鈴正六位上語公高世

別当

大書吏

知家事

家司署名皆書。又送「寂昭許金百両」、是一切経論・諸宗章疏等可

送求「料也。又所「志穂念珠一連。又唐僧常智送文集一部、其返物貂

裘一領送之。

貂裘はクロテン皮を原材料としたもので、八世紀から九世紀にかけて北東アジアに勢力を誇った渤海が、唐や日本へ使節を派遣したとき、特産物として貢進している。渤海の領域のなかで、クロテンが多く生息しているのは、沿海州からアムール川流域で、そこには服属した黒水靺鞨

が多く住んでいた。渤海の滅亡後、黒水靺鞨は女真という名に姿を変え、北東アジアを闊達に動き出す。サハリンのセディフ遺跡や千歳市美々8遺跡では、女真に類例のある青銅製裝飾品が出土しており、活動範囲は日本列島北辺にまで達していた。また、七世紀中葉には流鬼が居住していたサハリンもクロテンの産地であった。十世紀以降のサハリンには、北海道から押し出されたオホーツク文化の集団が暮らしていた。千歳市ユカンボシC8遺跡・美々7遺跡では、オホーツク文化の南貝塚式土器が出土している。すなわち、「奥州貂裘」は、沿海州からアムール川流域もしくはサハリン産のクロテンによって作られたもので、サハリン方面に進出した擦文人がオホーツクや女真との交易によって入手したものであった。しかも、この当時、鎮守府を中心とした勢力の拡大は著しく、津軽は陸奥側の管轄にあった。「奥州貂裘」がもたらされるにあたり、津軽エゾ・擦文人・オホーツク人・女真人など、北東アジアの様々な集団が介在したのである。そして、鎮守府將軍のような本州の権力者につながるものとの取引の場合は、新田(1)遺跡周辺であったと考えられる。そのうえ、道長が「奥州貂裘」を託した天台山は、中国の国家的な聖地でありながら、十世紀前後の混乱期には、日本・高麗などに天台書籍を献上させるなど、周辺諸国に支えられたという側面をもっていた。念救の来日も、道長に対して経済的援助を求めたためであったと説かれる。このとき中国大陸を治めていた宋は、北方の遼(契丹)との関係に悩まされており、遼の背後に位置する女真の動きに関心をもっても不思議ではない。目を朝鮮半島に向けてと、高麗は、東海岸部を沿海州から南下する女真にたびたび襲撃されていた。やがて、女真の南下は、朝鮮

半島にとどまらず、北部九州の博多まで到達し、「刀伊入寇」といわれる事件となる。高麗は、女真が博多から沿海州へ戻る際に、軍船で襲撃し、捕虜となった日本人を取り戻すなど、一矢報いる。「戈船」という軍船は大規模なもので、女真との争いのなかで、高麗の造船技術は飛躍的に進歩していた。<sup>④</sup> 高麗にとっては、女真の存在こそ、最大の脅威であったに違いない。

そうだとすると、道長が砂金によって、天台山を経済面で支援したとともに、念救に「奥州貂裘」を託したことの意味を問わなければならない。この前年、鎮守府將軍・平維良は、道長に様々な北方産品を献上することによって重任された(『小右記』長和三年(一〇一四)二月七日条)、いわば道長派の北方官人であった。献上品リストには、北海道産のアザラシを指す海豹皮が含まれており、彼が津軽とのパイプをもっていたことは確かである。道長には、彼から新田(一)遺跡周辺で獲得したアザラシ・クロテンをめぐる北東アジアの動向が入っていたであろう。そうした動きは、「奥州貂裘」を託す際、道長から念救へ伝えられたと推測される。さらに、念救が天台山に帰山したときには、宋の首都・開封とつながる僧や高麗の巡礼僧たちも、「奥州貂裘」を目撃し、あるいはその噂を耳にし、直接・間接に女真の勢力が遠く日本列島の北辺にも及んでいることを知ったであろう。つまり、「奥州貂裘」は女真の勢力拡大と脅威を伝えるという意味で、当時の北東アジア第一級のインテリジェンスを届けるものとして、道長から天台山へ贈られたのである。

古代末期の津軽で、倭系の木製祭祀具が用いられた背景には、こうした日本・高麗・宋などの東アジア諸国と女真・オホーツク・擦文人など

北東アジアの諸集団との相克があったのである。そのなかで、日本の古代国家の支配者層は、北東アジアの特産物の交易には応ずるが、彼らのもたらす穢れに対する著しい忌避感をもった。さらに、日本列島の北辺と北東アジアとの連携への危機も感じていたことであろう。津軽の在地勢力が「祭祀のみを受け入れた」として、木製祭祀具の伝播の原因を城柵や都など古代国家と結びつけることに慎重な見解が根強い。<sup>⑤</sup> 祭祀の目的も、首長が自らの配下の人心収攬のためであったという推測もある。<sup>⑥</sup>

しかし、倭系の境界祭祀こそが、重要な意義をもつのではないか。津軽の側がこれを積極的に受け入れたのは地元産の木材を使っていることからも明らかであり、それを伝えたのは城柵に派遣された官人や王臣たちである。津軽エゾが、北東アジアへの排外意識という都の貴族たちが抱いたのと同じ観念を身に着けていたことは間違いない。その一方で、津軽の社会はより複雑で、矢印土器のように北海道や北東アジアの基層信仰とかわるものが認められる。津軽エゾは、古代国家と北東アジアの葛藤・軋轢の狭間で、交易の仲介者として活躍し、双方の要素を併せもつ、複合的な文化・混合化した宗教を営んだ集団であった。彼・彼女らは、地元根差しつつも、平安後期の国家・北東アジアにも連なるという三つのアイデンティティを同時にもっていたのである。そうしたなかで、倭系の木製祭祀具は、津軽エゾが宗教儀礼によって古代国家と北東アジアを隔てていたことを示すとともに、彼・彼女らが交易によって北東アジアと経済的・精神的な紐帯を強めていたことを逆照射するものである。

## おわりに

以上のことから本州アイヌと津軽エゾの実体をまとめると、次のようになる。本州アイヌは、十世紀から十一世紀に津軽へ土着・移住した道南の擦文人の後裔で、十四世紀前半の『諏訪大明神絵詞』の渡党と出自を同じくするものであった。一方、津軽エゾは、七世紀以来倭王権・古代国家と強い関係をもった津軽蝦夷えみしが生産・交易・祭祀などあらゆる面で深化し、より北へ開かれたアイデンティティを育んだ集団のことである。ここまで述べたことを振り返り、古代末期から中世の北奥の歴史的特質を導くことで、むすびにかえたい。

十四世紀以降、中世北奥の一大勢力となった南部氏は、自らの領内にアイヌを抱えこんでいた。本州アイヌは、九戸城の戦いするときなど戦闘要員としての姿も垣間見えるが、交易の担い手としても活躍していた。彼・彼女らを媒介として、南部氏は、下北半島を経由しつつ、鷹・鹿・金などの豊富な資源のある北海道太平洋側へ進出していた。漆椀などの引き換えに得たこれらの特産物が、中世南部氏の権力基盤の一つになっていく。

中世において、北海道と本州を結ぶ交易は、『絵詞』に渡党として記録が残る道南のアイヌが窓口となっていた。彼らは、外ヶ浜へも出没していた。渡党に呼応する形で本州アイヌは外ヶ浜周辺に居住し、交易活動に従事した。渡党は、安藤氏と親密な関係をもっていたが、十四世紀前半の安藤氏の内紛により、外ヶ浜での交易が著しく滞った。これに対

して、津軽では交易の安定化を求めてエゾが蜂起し、渡党とその一味である本州アイヌ、唐子というサハリンを目指した中世アイヌを巻き込んでいく。その過程で、渡党は交易相手を求めて、北奥の太平洋側へと手を伸ばし、南部氏と接触を図っていく。外ヶ浜付近にいた本州アイヌは南部氏領内へ移住し、ここが南部氏と本州アイヌとの関係のスタートとなる。また、渡党は、アイヌのイナウに相当する「木を削て幣帛」状のものを使って天に誦呪するという習俗をもっていた。古代末期の津軽において、夥しい祭祀の跡が検出された新田（1）遺跡・十三盛遺跡では、斎串・有頭串など、イナウと同様の削り出しをもち、立てかけて使われる木製祭祀具が出土する。同じ時期の津軽には、渡党の前身となる道南の擦文人が土着・移住していた。彼・彼女らは、擦文土器を使用したり、須恵器・土師器に矢印のモチーフを付けたりするなど、自らの習俗に因む暮らしを営んでいた。木製品の加工技術、それをういた祭祀・信仰を目の当たりにした擦文人は、本州を源泉とする信仰を学び、自らの宗教観念に取り入れた。この観念を北海道へ持ち帰った集団がこののち渡党として躍動し、津軽にそのまま居残り定着した集団が本州アイヌとなっていくのである。

古代まで遡ると、この地は、『日本書紀』以下の『六国史』に登場する津軽蝦夷の本拠であった。蝦夷からエゾへの深化のメルクマールは、祭祀・信仰のなかに表れるアイデンティティに求められる。エゾの信仰は、地元・平安後期の日本の国家・北東アジア三つの観念が宗教混合したものであった。つまり、エゾの成立は、そうした宗教観念が成立・醸成されていく十世紀から十一世紀であったと理解できる。しかも、津軽

エゾから鎮守府將軍を経て、藤原道長へ貢納された「奥州貂裘」は、女真の日本列島北辺への出現という当時の北東アジア第一級のインテリジエンスを示すものであった。「奥州貂裘」が取引された新田（1）遺跡は、まさに平安後期の国家と北東アジアがぶつかり合う場ともなった。そのなかで倭系の木製祭祀具は、北東アジアから入り込む穢れを祓うものであり、津軽エゾが、交易を許しつつも、日本列島の北辺と北東アジアが連動することを警戒した、古代国家の支配者層の境界観と同じ觀念を身につけていたことを示している。その反面、このことは、彼・彼女らが北東アジアとの経済的・精神的つながりを強めていたことを逆照射するものでもあった。まさに、日本と北東アジアの軌轢の最前線に立つ津軽エゾは、地元・日本・北東アジアという複合的なアイデンティティを併せもつ集団なのである。

ともあれ、古代末期から中世にかけての北奥は、平安後期の古代国家や鎌倉幕府など日本列島の権力体と北東アジアとの接点という歴史的特質をもった。その狭間で、交易によって両者を結び付けつつ、宗教儀礼によって両者を隔てつつ、北方世界のキーパーソンとして躍動したのが、本州アイヌや津軽エゾたちであったのである。

## 註

- (1) 新井隆一「古代・中世の出羽北部と北日本海交通―八郎潟・能代・米代川流域をめぐって―」『環太平洋・アイヌ文化研究』一一 二〇一四年
- (2) 関根達人「本州アイヌの生業・習俗と北奥社会」『北方社会史の視

座』第一巻 清文堂 二〇〇七年

(3) 関根達人前掲註(2) 論文

(4) 入間田宣夫「糠部の駿馬」『北日本中世社会史論』吉川弘文館 二〇〇五年

(5) 南部町教育委員会『聖寿寺館跡発掘調査報告書Ⅷ』二〇〇三年、『青森県史』資料編考古4

(6) 関根達人前掲註(2) 論文

(7) 『青森県史』資料編考古4

(8) 長谷川成一「奥羽日の本仕置の中の北奥と蝦夷島」『近世国家と東北大名』吉川弘文館 一九九八年

(9) 海保嶺夫『中世の蝦夷地』吉川弘文館 一九八七年

(10) 斉藤利男「四通の十三湊安藤氏相伝文書と八戸南部氏」『奥羽から中世をみる』吉川弘文館 二〇〇九年

(11) 伊藤喜良「室町の南部氏」『北辺の中世史―戸のまちの起源をさぐる―』名著出版 一九九七年

(12) 入間田宣夫「糠部・閉伊・夷が島の海民集団と諸大名」『北の内海世界』山川出版社 一九九九年

(13) 千田嘉博「道南十二館」『北東アジア交流史研究―古代と中世―』塙書房 二〇〇七年

(14) 菊池勇夫「蝦夷島と北方世界」『蝦夷島と北方世界』吉川弘文館 二〇〇三年

(15) 海保嶺夫前掲註(9) 書

(16) 北海道埋蔵文化財センター『ユオイチャシ跡 ポロモイチャシ跡 二風谷遺跡』一九八六年、田村俊之・小野哲也「陸の民としてのアイヌ社会の漆器考古学―千歳市末広遺跡を中心に―」『考古学ジャーナル』四八九 二〇〇二年

- (17) 『青森県史』資料編考古4
- (18) 関豊「史跡九戸城の発掘調査」『骨が語る奥州戦国九戸城の落城』東  
北大学出版会 二〇〇八年
- (19) 新井隆一「奥州天台寺と古代北奥羽の太平洋沿岸交通―漆の交易路に  
注目して―」『環太平洋・アイヌ文化研究』一〇 二〇一三年
- (20) 北海道埋蔵文化財センター前掲註(16) 書
- (21) 越田賢一郎「北方社会の物質文化 鉄からみた北海道島の歴史」前掲  
註(14) 書
- (22) 鈴木琢也「北日本海における古代末期の交易ルート―十と十二世紀を  
中心として―」『古代中世の蝦夷世界』高志書院 二〇一一年、瀬川拓  
郎「中世アイヌ社会とエスニシティの形成」『北から生まれた中世日  
本』高志書院 二〇一二年
- (23) 長谷川成一「鷹と東北大名」前掲註(8) 書
- (24) 竹間芳明「文献史的考察」前掲註(18) 書
- (25) 乾哲也「厚真の遺跡を支えたもの―交易・シカ資源」『アイヌ史を問  
いなおす』勉誠出版 二〇一一年
- (26) 蓑島栄紀「北海道太平洋側内陸部におけるシカ皮・ワシ羽の生産・流  
通と生態系」前掲註(25) 書
- (27) 入間田宣夫前掲註(4) 論文
- (28) 蓑島栄紀前掲註(26) 論文
- (29) 瀬川拓郎『アイヌの世界』講談社選書メチエ 二〇一一年
- (30) 新井隆一「陸奥産金と征夷―道嶋(丸子)氏の活躍を通して―」『法  
政史学』八〇 二〇一三年
- (31) 長谷川成一「近世初期の鉱山開発と「天下之御山論」―北日本を中心  
に―」前掲註(2) 書
- (32) 小葉田淳「南部領の金山」『日本鉱山史の研究』岩波書店 一九六八
- 年
- (33) 菊地勇夫「蝦夷島の開発と環境」前掲註(14) 書
- (34) 小葉田淳「鉱山技術史」前掲註(32) 書
- (35) 萩原三雄「甲斐の金山と武田氏」『定本 武田信玄』高志書院 二〇  
〇二年
- (36) 入間田宣夫「日本史のなかの南部氏」『中世糠部の世界と南部氏』高  
志書院 二〇〇三年
- (37) 入間田宣夫「北奥における地頭領主制の展開―沙弥浄光讓状を読み解  
く―」『東北中世史の研究』上巻 高志書院 二〇〇五年
- (38) 『青森県の歴史』山川出版社 二〇〇〇年
- (39) 小口雅史「津軽安藤氏の歴史とその研究―基調報告にかえて―」『津  
軽安藤氏と北方世界』河出書房新社 一九九五年
- (40) 小口雅史「日の本」世界の誕生と「日の本將軍」『エミシ・エゾ・  
アイヌ』岩田書院 二〇〇八年
- (41) 大石直正「北の周縁、列島東北部の興起」『周縁から見た中世日本』  
講談社 二〇〇一年
- (42) 木村淳一「青森市石江遺跡群の特質」『古代末期・日本の境界』森話  
社 二〇一〇年
- (43) 青森市教育委員会『石江遺跡群発掘調査報告書VI』二〇一三年
- (44) 榎森進「北東アジアから見たアイヌ」前掲註(14) 書
- (45) 新井隆一前掲註(1) 論文
- (46) 大林太良「イナウの起源」『北方の民族と文化』山川出版社 一九九  
一年
- (47) 北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群XX』一九九七年
- (48) 札幌市教育委員会『K39遺跡第6次調査』二〇〇一年
- (49) 藤井誠二「札幌市出土の木製品」『新北海道の古代3 擦文・アイヌ



文化』北海道新聞社 二〇〇四年

(50) 大林太良前掲註(46) 論文

(51) 田口尚「アイヌ文化の木製品」前掲註(49) 書

(52) 藤井誠二「木製品…その分類基準と北海道における変遷の特徴」『北海道大学総合博物館研究報告』四 二〇〇八年

(53) 瀨川拓郎「祖印か所有印か―擦文時代における底面刻印の意味と機能―」『環太平洋・アイヌ文化研究』一一 二〇一四年

(54) 笹田朋孝「擦文文化期までの鉄器の普及と交易」『北海道における鉄文化の考古学的研究』北海道出版企画センター 二〇一三年

(55) 木村淳一前掲註(42) 論文、青森市教育委員会『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』二〇一一年

(56) 渡辺晃宏「新田(1) 遺跡出土木簡の意義」前掲註(42) 書

(57) 新井隆一「古代北奥羽の律令的祭祀」『古代文化』五八―一 二〇〇六年、鐘江宏之「出土文字資料からみた東西差・南北差」『九世紀の蝦夷社会』高志書院 二〇〇七年

(58) 鈴木靖民「平安後期・北奥の祭祀・交易・経営拠点と交流」『東アジアの古代文化』一一一 二〇〇四年、鈴木靖民「北東北の祭祀・交易と集落―異域・中世への胎動」『北方世界と古代のコシ―北ツ海のゲート・ウェイ』『日本古代の周縁史』岩波書店 二〇一四年、三浦圭介「平安後期の北奥世界―林ノ前遺跡・新田(1) 遺跡の意義―」『東アジアの古代文化』一二五 二〇〇五年

(59) 小口雅史「古代末期の北方世界―北方史グループの研究視角―」前掲註(42) 書、木村淳一前掲註(42) 論文

(60) 青森県教育委員会『十三盛遺跡』二〇一三年、五所川原市教育委員会『十三盛遺跡』二〇一三年

(61) 三宅和朗「律令期祭祀遺物の再検討」『古代の王権祭祀と自然』吉川

弘文館 二〇〇八年

(62) 水林彪『記紀神話と王権の祭り』岩波書店 二〇〇一年

(63) 黒崎直「斎串考」『日本考古学論集3 呪法と祭祀・信仰』吉川弘文館 一九八六年

(64) 新井隆一前掲註(57) 論文

(65) 大林太良前掲註(46) 論文

(66) 三浦圭介「古代」『弘前市史』一九九五年、齋藤淳『海峽世界』の歴史の枠組について―生業と交流の視点―前掲註(25) 書

(67) 青森県教育委員会『石上神社遺跡発掘調査報告書』一九七七年

(68) 瀨川拓郎前掲註(53) 論文

(69) 瀨川拓郎前掲註(22) 論文

(70) 青森市教育委員会『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』二〇一二年

(71) 松下亘「擦文式土器の刻印について」『物質文化』四七 一九八六年

(72) 瀨川拓郎註(53) 論文

(73) 青森県教育委員会『水木館遺跡』一九九五年、青森県教育委員会『稲垣村久米川遺跡』一九九四年、青森県教育委員会『野尻(1) 遺跡Ⅱ』一九九九年、青森市教育委員会前掲註(55) 書、野辺地町教育委員会『二十平(1) 遺跡』二〇〇七年

(74) 葦島栄紀「肅慎羽」再考―平安期における「北の財」とエゾ認識―『環太平洋・アイヌ文化研究』九 二〇一一年

(75) 岡崎晋明「文字と記号」『日本の古代14 ことばと文字』中央公論社 一九八八年

(76) 八戸市教育委員会『殿見遺跡発掘調査報告書Ⅱ』一九九四年、北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群Ⅷ』一九九六年、余市町教育委員会『大川遺跡における考古学的調査』I 一九九六年、青森県教育委員会『岩ノ沢平遺跡』二〇〇〇年

- (77) 八木光則「北海道における擦文文化の成立」『古代蝦夷社会の成立』同成社 二〇一〇年
- (78) 山本哲也「ロクロ土師器と北海道」『国学院大学考古学資料館紀要』一三 一九九七年
- (79) 中田裕香「擦文文化の土器」前掲註(49) 書
- (80) 菊池俊彦「胡馬と蝦夷の馬」『北の環日本海世界』山川出版社 二〇〇二年、白杵勲「靺鞨・女真系土器研究の課題」『サハリンから北東日本海における古代・中世交流史の考古学的研究』二〇〇三年
- (81) 鈴木靖民「無文字社会と文字・記号の文化―信仰とともに伝わる文字―」『古代日本の周縁史』前掲註(58) 書
- (82) 北海道埋蔵文化財センター『キウス9遺跡』二〇〇八年
- (83) 青森市教育委員会『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』二〇一〇年
- (84) 瀬川拓郎『アイヌの歴史―海と宝のノマド』講談社選書メチエ 二〇〇七年、蓑島栄紀「北方社会の史的展開と王権・国家」『歴史学研究』五七二 二〇一〇年
- (85) 小野裕子・天野哲也「アイヌ化と領域―北奥アイヌ文化の形成過程を考える―」『中世東アジアの周縁世界』同成社 二〇〇九年
- (86) 木村淳一前掲註(42) 論文
- (87) 蓑島栄紀「阿倍比羅夫の北航と北東アジア地域」『古代国家と北方社会』吉川弘文館 二〇〇一年
- (88) 瀬川拓郎『アイヌの世界』前掲註(29) 書
- (89) 新井隆一前掲註(1) 論文
- (90) 蓑島栄紀「古代出羽地方の対北方交流―秋田城と渡嶋津軽津司の史的特質をめぐって―」前掲註(87) 書
- (91) 樋口知志『阿弖流為』ミネルヴァ書房 二〇一四年
- (92) 西野修『志波城・徳丹城跡』同成社 二〇〇八年
- (93) 新井隆一「九世紀の城柵と北方社会―田村麻呂プランとその挫折―」『弘前大学國史研究』一三三 二〇一二年
- (94) 西野修前掲註(91) 書
- (95) 新井隆一前掲註(93) 論文
- (96) 三浦圭介「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『北日本の考古学』吉川弘文館 一九九四年
- (97) 新井隆一前掲註(57) 論文
- (98) 蓑島栄紀前掲註(90) 論文
- (99) 新井隆一前掲註(93) 論文
- (100) 蓑島栄紀「津軽蝦夷の特質と交流―本州北部社会と北海道の交流の変遷―」前掲註(87) 書
- (101) 熊田亮介「賊気已衰」『古代国家と東北』吉川弘文館 二〇〇三年
- (102) 三浦圭介「遺跡から見た津軽における古代社会の変質と画期」前掲註(13) 書、井出靖夫「須恵器・鉄生産の展開」『九世紀の蝦夷社会』高志書院 二〇〇七年
- (103) 齋藤淳前掲註(66) 論文
- (104) 青森県教育委員会『向田(35)遺跡』二〇〇四年
- (105) 井出靖夫「北日本における古代環壕集落の性格とその背景―計量的分析からのアプローチ―」『津軽唐川城跡―古代環壕集落の調査―』富山大学考古学報告第七冊 二〇〇二年
- (106) 齊藤利男「蝦夷社会の交流と「エゾ」世界への変容」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版 一九九六年
- (107) 小口雅史「文献史料からみた「エゾ」の成立―天野哲也「考古学からみたアイヌ民族史」へのコメント(2)―」前掲註(40) 書
- (108) 鈴木靖民前掲註(58) 論文
- (109) 三浦圭介前掲註(58) 論文

- (110) 齊藤利男「安倍・清原・平泉藤原氏の時代と北奥世界の変貌―奥大道・防御性集落と北奥の建郡―」『十和田湖が語る古代北奥の謎』校倉書房 二〇〇六年

(111) 青森市教育委員会『石江遺跡群発掘調査報告書』二〇〇七年

- (112) 小口雅史前掲註(59) 論文。さらに、小口雅史氏は青森市教育委員会『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』(二〇一四年)のなかでも「在地性」を際立たせ、齊藤利男氏の説を批判する。私には、小口氏を中心とする研究会が、「在地性」を強調した果てに最終的に何を見い出したのか、よく分からない。

(113) 新井隆一前掲註(19) 論文

(114) 川尻秋生『平将門の乱』吉川弘文館 二〇〇七年

(115) 蓑島栄紀前掲註(74) 論文

(116) 酒寄雅志「渤海の交易―朝貢・互市、そして三彩」『日本と渤海の古代史』山川出版社 二〇〇三年

(117) 白杵勲「契丹・女真との交流」『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』吉川弘文館 二〇一〇年

(118) 小嶋芳孝「環日本海交流の様相」前掲註(13) 書

(119) 菊池俊彦『オホーツクの古代史』平凡社新書 二〇〇九年

(120) 蓑島栄紀「渤海滅亡後の北東アジア諸民族と長距離交易」前掲註(87) 書

(121) 蓑島栄紀「平安貴族社会とサハリンのクロテン」『北方島文化研究』三 二〇〇五年

(122) 齊藤利男前掲註(110) 論文

(123) 上川通夫「入唐求法僧と入宋巡礼僧」前掲註(117) 書

(124) 石井正敏「高麗との関係」前掲註(117) 書

(125) 八木光則「古代末期の北奥蝦夷社会」前掲註(42) 書

(126) 八重樫忠郎「考古学からみた北の中世の黎明」『北から生まれた中世日本』前掲註(22) 書

(あらい・りゅういち 大日本図書)